
天然娘 & ヤンキー娘っ！

蜂蜜@

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

天然娘&ヤンキー娘っ！

【Nコード】

N5440D

【作者名】

蜂蜜@

【あらすじ】

アタシ・・・水城ソラ（15）はヤンキー。ある日携帯を無くしちゃって探したら、超天然女が携帯を持っていた！？しまいには携帯片手に「ヤンキーのグループに入りたい」など言ってる・・・！？

(前書き)

ジャンルはコメディーマンだけど、すこしグロいよーなトコもあります。多分注意。；

アタシ・・・水城ソラ（15）はヤンキー。ここらでも有名な・
・では無く、小さくこじんまりとしたグループだ。グループ名は特
になし。けっこう若い者がたくさん集まってるトコ・・・人数は1
0人くらいだ。だが最近集まる人数が少ないし、抜けてく奴らも多
い。結果・小さくこじんまりとしたグループになったという訳。

私はショートカットの金パツ。腰にぐるぐると包帯のようなモノ
を巻き、少し敗れかけのジーパン。黒いコート（他の色のコートの
奴もいる。だいたいは黒）をバサツ、と羽織はつている。アタシ達
の集まり場所は狭い路地を通った空き地の場所。草がぼうぼうと
生えてるくせに、なぜか真ん中の方だけぽっかりと刈り取られてい
る。そんでもって、ソコに居座ったという事だ。ちなみに辞書を引
くと『2（路地・露路）建物と建物との間の狭い道。3（路地・
露路）門内や庭内の通路。4（露地・路地）草庵式茶室に付属し
た庭。腰掛け・石灯籠いしとうろう・飛び石・蹲踞つくだいな・・・』とあるが2
番の方だ。

さて、アタシは今携帯を探している。なんか知らねーけど、誰か
とぶつかった時に携帯と携帯をすり違って持っていったらしい。

そのおかげでアタシはわざわざ探さなくてはならない。もしかし
たら落ちているかもしれない。

ぶつかった人と会うかもしれない。もしもアタシの携帯の中見
てたら半殺しにするけどな！

そんな時アタシの後うしろからめずらしく声を掛けてくる奴がいた。

「すみません。ちょっといいですか？」女の声だ。めずらしいな、どーせ道とかなんとか聞きたいんだろう。アタシはその声の方向に振り向かずに、探し続ける。

「ああ！？今忙しいんだよっ！」でもアタシは忙しいので暴言を吐いて追っ払う事にした。大抵はこれで逃げていくのだが、まだ女は後にいるようだ。『しつkeerなっ！（しつこいな）』と言おうと振り向くと、女の手にはアタシの携帯が握られていた。

「そうですかー。じゃ・この携帯はいらないんですねー。じゃ、さようならー」

「あっ！までお前っ！それアタシの携帯！」アタシが女の手から奪い返そうとするとひょいとアツサリ逃げられた。女はニコリと笑う。

「お礼は？」

「あ、ありがとな・・・」

「では私の携帯と交換です」と、アタシの携帯をしっかりと持ったまま言う。今更だが、女はフワフワの栗色の髪に、軽くウェーブのかかったヘアースタイル。そんなもってジーンパンとTシャツというなんだか楽なスタイルだ。こういう女はワンピとか似合いそうなのにな。

アタシはジーンパンのポケットからこの女のモノとみられる携帯を出した。そして携帯と携帯を交換しようとした時。

「一つお願いがあるんですけどいいですよね？」女はアタシの携帯

をしつかりとまだ握っている。『いいですか？』では無く、『いいですよ？』と押し付け的な事を言うなんて……このアタシに向かつて……！（しかも礼なんか言わせやがって！）

「だ……駄目だ、と言おうとした。だがアタシの頭の中でピーンと閃く。

そっだ……コイツをコテンパンにしてやれば……！！

アタシは我ながらナイスアイデアを思いついたと思い、口元が緩んだ。

「お前……名前は？」

「水城つていいいます！水城楽羅みずきかくらです！」

「よし、楽羅。願いは？」

「えつとですねー……貴方と同じヤンキーのグループに入りたいんですよ〜」

「……は？」

「ヤンキーのグループに入りたいんです〜」

何言っつてんだコイツ。裕福そっで、幸せそっな楽羅コイツが。ヤンキーになりたいだなんて。

「……まあいいけど。じゃ・ちょっと着いてこい」アタシは楽羅に背を向けて歩き出す。楽羅も分かったように着いてきなが

ら返事をした。

「分かりました親分」

「は？」

「え？ヤンキーでは先輩方に『親分』と言うのでは？」

「……なにソレ……？」

「え、あの……違うんですか？」

「……違うよ」

「そうですか……残念です」

「別にいけどさ……敬語は止めな。堅苦しいから」

「え・はい。分かりました」

「……敬語」

「え？」

「敬語はいいって……」

「え？敬語って何ですか？」

「あのね〜！」

「……………すみません」

「あんたって学校行つてんの？それでも……………」

「……………？行つてないです」

「……………は？なんで？」

「昔から身体が弱かったもので。今は健康なんですけど……………今更に行くのは嫌ですし」うなだれたような声を出す楽羅。私は前を見て進んでいるので表情がイマイチ分かんねーが、きつと悲しそうな顔をしているのだろう。

「……………大丈夫なのか？そんなんで……………」

「はい。今は健康ですよ」

「……………そうか」

「はい。そうかなのです」

「……………お前ってさー天然だよな」

「よく言われます。でも意味がよく分かりません……………」

「……………着いたぞ」アタシは楽羅の天然っぷりにも呆れながら『アタシ達の場所』に着いた。何故か仲間の間ではそう呼ばれている。何故か知らないが、いつもココにいる皆が居なかった……………くそー！どこに行つてるんだよ！

「わ〜！こんな所があつたなんて〜！草が無いです！でも周りがぼろぼろです！」なんかすごくハシャイでるな……。でも今だけだ。こんなにハシャげるのは……！」

アタシは心の中で高笑いをしながらワイワイハシャぐ楽羅を見る。

「なあ、楽羅。ココに入るには条件があるんだよ」

「え？条件ですか？」

「ああ。そつだよ条件がある」

「なんですか？条件つて……？」

「それはな」と、言いかけてハッ、と息を呑んだ。

見られている……！！

「誰だ！」アタシはぐるつとあたりを見回す。

「……！！」

数十人かに囲まれていたのだ。アタシと楽羅が。多分昔対立していたグループだろう。

「……？誰でしょうか……？」アタシは真剣にヤバイと思ったが、楽羅だけはのんびりと落ち着いていた。

数十人のうちのリーダーらしき人が口を開く。

「なー、ソラ〜？ウチらにその場所くれない？」

「断る！」

「ふーん。じゃ、こいつ等らどうなってもいいんだ？」と、子分らしき人等ひとらがアタシ達のグループのメンバーを引きずってきた。頭や身体に傷が付き、血が流れている。

「ソ．．．ラ．．．ウチ等の事はいいから．．．逃げて．．．」
「！」グループの一人・ミナが必死に口を開く。

「ほらほら〜。グループのお一人さんも言ってる事だしサツサと尻尾巻いて逃げたらあ？」からかうような口調。そして、子分達はクスクスと笑った。アタシはその仕草にムカツときた。

「．．．．．そんな事．．．．．！．．．．．できるかよっ！」

アタシはその場に落ちていた木刀を拾うと、10人に向かって走り出した。

「楽羅！アタシ等の事はいいから逃げろ！ここはアタシでなんとかする！」アタシは楽羅に向かって叫ぶ。だが楽羅は以外な行動をとる。

「！？」

楽羅は木刀を手に取ると次々と倒れていく。とんでもない速さスピードで鮮やかで華麗な手さばき。誰もが見とれるほどの．．．．．。

アタシがそう思った時にはもう敵のグループは全員倒れていた。

目立った傷は無い。かすり傷程度で気絶させたのだ。

「楽羅……お前何者だ……？」
なにもん

アタシはおもわず呟いていた。

皆の傷が大分治ってきた頃。アタシ達は珍しく『アタシ達の場所に全員そろっていた。楽羅も含めて11人。』

皆は期限よさそうに楽羅を見つめていた。特にミナは鼻歌まで歌っている。

「な〜ソラ！アンタこんな上出来な奴連れてくるとはね〜。この前の凄かったなあ、楽羅。入るよな？このグループに」

ミナは強引に楽羅と肩を組んだ。ミナのデコに見るからに痛そう
な大きな傷がついている。だが、ミナは平気そうだった。慣れてる
のだと思う。

楽羅はやけにのんびりした動作で頷き、やけにのんびりした口調
で言う。

「はい〜入ります〜。ぜひとも〜」

「な〜？ソウダロソウダロ〜？」

「なっ……何勝手に決めてんだよ！皆の了承も無しで！」

アタシは立ち上がり、ミナに向かって反発する。するとミナはふっ、と鼻で笑った。

「あら嫌^{ヤダ}。グループの了承はちゃあーんと取ってあるわ。グループほぼ全員が了承してますわよー」変なオネエ言葉で喋り終えたミナは、勝った！と言う顔で高笑いをした。

「うっ……」アタシは何にも言い返せなくなって床にペタンと座った。悔しいけど、グループのほぼ（つまりアタシ以外）賛成してるなら……言い返せない。

「あ、ソラさん」さっきまで違う方向を向いていた楽羅は、アタシにぐりんと首だけ向けた。

「あ？何だよ？」

「ヤンキーって居るダケで給料貰えるんですよね？？」

「」「」「」「」「……」「……」「……」「……」
は？」「」「」「」「……」「……」「……」「……」

「あれ……そう習ったんですが……？？」

「お前なっー！誰から習ったんだだよ！」

「えっとー。忘れましなっ」

「……はあ」

「貰えないんですか……？」凄くうるうるとした瞳でアタシを見る。

……くっそー！何でアタシなんだよっ！！！！

内心そう思ったが、楽羅の凄くうるうるとした瞳に負けてしまい、月給1000円で雇われた楽羅だったのだった。（ちなみに楽羅の給料はアタシの自腹……）

とにかく。

このメチャメチャ強い楽羅を入れて、お気楽なヤンキー達、ちなみに名前は右からミナ……（以下略）、そしてアタシのヤンキー生活はまだ始まったばかりなのだ。これから先が大変そーだ……

。。（泣；

(後書き)

続編はできるかもしれませんが。(どっちだ！)皆さんの評価したいw
(苦笑)っていうか連載ほったらかして短編書いてる人って・・・
.....

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5440d/>

天然娘&ヤンキー娘っ！

2011年1月27日06時31分発行